
crazy joker

川崎 鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

crazy_joker

【Nコード】

N6912K

【作者名】

川崎 鉄馬

【あらすじ】

フランスから来た『道化師野郎』と純真無垢な『カトリック少女』が中心となって織りなす純愛系退魔師ファンタジー 現在大幅改定中につき更新ストップ

出会い／rencontre（前書き）

この作品はMercurius様の作品である『A++』の世界観を基盤とした作品です。本家とは一味違った『A++』をゆつくりとご堪能ください。

出会い／rencontre／

昔から自殺者が絶えることのない青木原樹海で、二人の男性が歩いていた。

ずんずんと迷い無い足取りで進む中年の男性は、終始笑顔を絶やさず、さらには鼻歌などを口ずさんでいる。対して未だ成人すらしていないかろう一人は、見た目に似合わず、木製のステッキを握り疲労困憊の様子。

誰がどう見ても、おおそ自殺に赴く雰囲気などではない。ならば何故こんな場所に、それもピクニックかキャンプに来たような、晴れ晴れとした様子で歩いているのかと疑問に思うが、事実そうなのである。

「よし。今日はここいらでキャンプと洒落込もうじゃないか稔二等兵。今日は、泣く子も黙るバーベキューだぜっ！」

「人間かどうかすら怪しい肉塊を見た後なのに肉食えとっ!? それとさつきから二等兵だなんだ五月蠅い! 親父、フランス陸軍2年で辞めたんだろ?」

「む!? 上等兵が上官に口答えとはけしからんな。罰則として樹海100周してこーいっ!」

「……ハア」

若人、もとい稔と呼ばれた青年は、もう一人の男性であるところの父親の性格を熟知しており、潔く諦めて、二人は日が暮れる前にはテント等の設営を開始した。

しばらくして、黙々とテーブルを設置していた稔がふいに、父親に話しかけた。

「ん? 親父、肝心の燃料が無いんだけど」

「薪たきぎの方が風情があつていいと思つてな。お前はまだジャパニーズワビスビがわかつてないなあ」

「……そんじゃ、小枝拾いにでも行つてくる」

「な、なんだそのジト目は！　それが親に対してする目かと説教したいが、なんだが少しながら喜びを感じてしまう私は――」

内心、この変態馬鹿親父！　と激しく罵りつつ、10分はゆうに漫談を続けることが明確であることから、稔は愛用しているステッキを握りしめ、夕暮れ時の樹海に身を投じた。

「夕暮れ時までには帰ってこいよ」

背後で父が発した何気ない一言の意味を、身を持って知ることになるとも知らず。

稔の父親が言った言葉は、あながち冗談ではない。稔は、全くもってワビサビが理解できていないのだ。そんな物言いだと、日本全土の紳士淑女がみんな理解しているのかと言われそうだが、当然そんな事はなく、そして彼はそんな事実さえも知り得ていない。つまりは『日本人ならばワビサビを理解できて当然』と誤認しているのである。

誤認の原因はなんといつても、彼が長年フランスに在住していた事実起因する。幼少時から足の不自由な彼は、治療の為に日本よりも医学の進んだフランスへと渡った。手術は無事に成功し、車椅子からステッキを肌身離さずもつまで成長し、これでめでたく帰国、そのはずであった。だが、稔の両親共々フランスをいたく気に入る、帰国するどころか帰化してしまったのだ。一文字違いだが凄まじい大違いである。

何はともあれそんな気苦労が絶えない彼は、今回親の都合との名目で来日。再度永住権を取得してから早1ヶ月は経つが、未だに日本の美意識が理解できていなかった。

そして、ここに来てようやくやりわりとだが、理解に至ったのだ。剣道や抹茶や礼儀作法には全く美意識を感じなかった彼が美しさを感じたのは――なんの変哲もない『森林』だった。

青空はひどく澄み切っていて神秘的。

樹木達は互いに寄り添うように、高めあうようにして成長している。

風や小川は流れを調和しながら、さもワルツを踊るように流れていく。

何気ない日本の森林に、彼は素直に素晴らしいと感じた。「もしかしたらこれはワビサビでは無いのかも……」などという疑念すら消し去るほどに、彼は普通の森林に没頭していた。途日し、早1ヶ月経って尚、日本に馴染めていない、飄々として人と深い関係を気付こうとしない、いつもその場しのぎで取り繕ってばかりいる。そんな彼と自然の『協調性』の違いに憧れを感じたのかもしれない。そうして『俺も、こんな風になりたいな』などとそう一人ごち、薪集めに専念しようかと思った。

そんな矢先だった。背後で、低い唸り声が鳴った。稔は、熊か何かと検討をつけ、熊避けの鈴を付けてくればよかったと後悔しつつ、恐る恐る振り向いた。

だがそこには、熊など足元にも及ばないほどの、世にも醜い人間擬きが佇んでいた。古めかしく、ボロい着物を身に纏い、さりとて顔は生物と形容しがたい、とても醜い顔をしている。

おおよそ、人間には不可能であろう、とても醜い微笑を湛えて。

「え……」

思わず声がでた。獣如きなら対処方はいくらでもある。ただか生物だ。しかしながら、目の前の『モノ』は決定的に何かが違う。生物としての根本から異質で、必要不可欠な何かが欠落していると己の全てが理解してしまう。そして、それは明確な意志となつて、稔しんの中で浮き彫りとなった。

コイツは危険だ。

向こうも稔しんのそんな状況を察したのか、醜い鬼のような婆おばは、これまた醜い叫び声を揚げて飛びかかってきた。コンマ何秒の中にもかわらず、鬼婆は凄まじい勢いで距離を詰めてくる。

稔しんはただただ立ち尽くし、その光景を焦点の定まらない眼で視て
いるしかなかった。

徐々に鬼婆との距離が5メートル、3.5メートル、2.25メートルと縮まってゆく。

鬼婆との距離がとうとうメートルほどにさしかかると、稔はいよいよもうダメかも知れないなどと思い、目を瞑った。

だが、いつまでたっても鬼婆は稔に到達しなかった。稔も確実に近付いてきたのは目に見て理解した。しかし、2、3秒経つても未だに自分は痛みを自感していない。不信に思った稔は、ゆっくりと目を開け、愕然とした。

鬼婆の周りの木々が、その枝々を手足のように差し伸べ、鬼婆の手足へと後から後から絡み付いているのだ。鬼婆は苦悶の表情を浮かべ、手足をバタつかせて、苛立ちを露わにしながら、声とも形容しがたい叫びを発している。

状況はかなり不利といえる。何しろこちらは相手は何かすらわかっていないのだから。

だが、ただ突っ立って死んでやるほど稔はお人よしではないらしく、先の鬼婆の走りから逃走を断念した。決意の炎を瞳に湛え、父特製のヤドリギ製ステッキを眼前で、地面と垂直になるように構えた。

一瞬で勝負は決する。

鬼婆の眉間めがけて突きを放った。凄まじい勢いで鬼婆が叫ぶ。それでも稔は、必死に自らを奮い立たせ、勢いを増しながら迫っていく。生物に対して眉間への攻撃は非常に有効だと、その思いを剣ステッキ

に込めて。

「ぐっ！」

思惑は失敗半分、成功半分だった。

クリスマスの際に飾るリースで有名なヤドリギだが、実際は北欧神話でバルドル神を殺害したなどと神秘的な樹木でも名高い。そんな木を、魔除け代わりとしての意味も兼ねて作ったステッキは、見事に鬼婆の眉間へと突き刺さり、貫通した。さらに、肉と脂肪が焦げるような悪臭や音、黒い煙までもを立ち上らせた。急所に加えて弱点までもが鬼婆を襲ったのだ、効果覲面である。しかし、今なお突き刺さった『まま』の状態になってしまったことが、かえって稔の状況を劣勢へと追いやった。貴重な武器を失いながら、さらには鬼婆の強烈な叫びによる衝撃波で吹っ飛ばされた稔は、背後の木へと叩きつけられた。木の幹が抉れた事から威力のほどがよくわかる。稔は、体中の空気が抜ける気分、背中 of 焼けるような激痛と共に、意識が朦朧とする感覚を感じていた。だがこんな所で意識を飛ばす訳にはいかない。飛ばせば最後、分けの分からぬ怪物のエサだ。何としてもそれだけは避けなければなさない。稔は^{じん}気を振り絞って立ち上がった。その様子に鬼婆は、補食されるべき対象^{じやく}如きに一泡吹かされ、あわよくば反抗的な態度をされたのが癪に障ったのか、先と同じように奇声を揚げて、さりとてその力は先刻以上にして木を引きちぎり突進してきた。

「来るならこいつ！」

この場において勝算などは皆無に等しい。しかし、そんなものがあるとするばさっきの不思議オカルト現象の発生に賭けるしかない。稔は祈った。現象が起こる事を。この美しい森林を汚す、醜い人間もどきを倒したいのだと。その健気な願いが神に通じたのか、現象は現れ、今回はやや苦戦しつつも、なんとか鬼婆を再度捕獲するのに成功した。

しかし。

「な、なん、だ……？」

脱力。体の芯から力という力が消失する感覚が、稔を、危機的状況にも関わらず襲った。鬼婆はこれを勝機と見たか、渾身の力を振り絞り、絡みつく木を引きちって、今にもその鋭き爪を稔へと振りかざさんとしている。今度こそ、死ぬ。稔の眼前を明確な死の光景^{ビジョン}が支配した。

だが、所詮そんなものは稔の錯覚に過ぎない。実際、今この場を完全に掌握したのは鬼婆ではなく、恐怖でもなく、ましてや死の悲劇ではなく、突如として現れた一人の少女だった。

「主よ、立ち上がってください。わたしの神よ、お救いください。全ての敵の顎を打ち神に逆らう者の歯を打ち砕いてください。救いは主のもとにあります。あなたの祝福があなたの民の上にありますように」

瞬間、光が視界を覆った。人工光の特有の鬱陶しい眩しさは無く、それどころか見るもの全てに慈愛と労りの心を思い出させるような、そんな優しい光だった。

否、それは人間だけが感じたようだ。後少しで木をふりほどけた鬼婆は、この世の終わりでも来たかと思わんほどに狂い叫びながら、爪先から徐々に消滅していった。

最後に鬼婆は――いや。もはや醜い顔^{ヘルソナ}が剥がれ落ちて、元々の美しい顔が現出し、一人の女性へと変貌した彼女が、流した一筋の涙は今の光にも似た美しさをはらんでいた。彼女は、酷く穏やかな笑みをこぼしながら、この世から静かに存在を消した。

その様子を見たからか、心底安堵した稔は、安らかに意識を闇の中へと沈めていった。

出会い（rencontre）（後書き）

如何でしたでしょうか。前書きではあんなにも仰々しく書きましたが、ホントは内心心臓が爆散するんじゃないかと思うぐらいにまで緊張していました（笑）

A++の世界観を壊さぬよう細心の注意を払いつつも、自分なりの価値観を織り込んでいこうと思っています。読者の皆様に楽しんでいただけるよう尽力の限りを尽くしますので今後ともよろしく願います。

馴れ初め Le commencement d'amour (前書き)

長らくお待たせいたしましたして申し訳ありませんでした。第二話です。

馴れ初め Le commencement d'amour

「一体、何がどうなって……？」

起床一番。稔自身、呟かずには居られなかった。勇気と技術と運を振り絞って挑んだ鬼婆が、突然起こった謎の発光現象でいとも簡単に、あっさりと消え失せたのだ。稔でなくとも愚痴ってしまうだろう。

「起きられたようですよ」

「……そうみたいです」

稔がふと横を見ると、１メートル程しかないような小人と、白を貴重とした服装を身に纏った少女が軒を連ねていた。世にも奇妙奇天烈な取り合わせだが、つい先程まで、複雑怪奇な異形の塊とさえ見える山姥を、直にその目で見ていたのだ。そして稔に驚きは無かった。というより、それにも増してこんな場所にいる彼女たちへの不信感の方が遥かに強いのだ。——自分の事はるか頭上に棚上げて。

困惑する稔をしかと見つめて、少女は一步、歩み出た。

「一言、注意させていただきます。あなたも一介の退魔師なら自分の霊力量ぐらいきちんと見極めて戦ってはいかがです！ 初戦闘で油断したのか、鬼婆如き一撃で除霊できると過信したのかは知りませんが、それぐらい危惧するのはできるでしょうに。あまりにも無謀すぎます！」

「……えっと言ってる意味がよくわからないんですけど。TAIM ASHIって何ですか？」

「なっ！ しらばつくれるなんて！ ……心配して忠告してあげてるのに。こんな失礼な退魔師、あったことはありません！」

意味不明な単語を連発する上にいきなり怒る勝手気ままな少女に、稔は困ったように笑った。それをやや不審に思った少女は不貞腐れた顔で尋ねた。

「……どうかされましたか？」

「え？ ああ、いや。改めてみると日本の子ってやっぱり可愛いな
と思つてさ。しかもキミなんか、おれがあつた中で一番素敵だ。V
ous ? tes v r a i m e n t j o l i i (最高に可愛い)」
一瞬、場が凍りついた。

少女は思わず目を点にした。そして3秒たつたくらいにようやく、
自分が猛烈な勢いで口説かれてると理解できたらしく顔を真っ赤に
して咬みついた。

「い、いきなりなんてこと言いだすんですか！ しらばつくれるう
え、誑しだなんてっ」

「T A R A S H I ? ごめん、日本に来てまだ日が浅いから言葉が
わからなくて。どういう意味なの？」

「……っ！ 知らなくていいですっ！ ……それよりも、この依頼
に関しては私が受理されたはずです。共闘の依頼もされていません
し、どういうことですか？」

まったく話の通じない少女に、稔がキレた。

「だ・か・ら！ 言ってる意味がわからないんだってば！ 一人で
話し進めるのが j a p o n a i s (日本人) の流儀なの？ もっと
相手も思いやる人らだと思つてたのに」

憤慨した稔の様子に、やっと状況が自分の考えていたのとは少々
違つていとわかり、少女は恐る恐る言つてみた。

「えと、もしかして、その、ホントにもしかしたらなんですけど――
退魔師の方ではないと？」

「その T A I M A S H I ってのがなんなのかは知らないけど、少な
くとも僕はただの一般人だ」

再び静寂が訪れた。そして一瞬後、少女は驚きのあまり銃海全域
に届くのではないかと考えるほどの叫び声をあげた。

「え、ええー！？ ど、どうしょ。一般人に知られちゃいけない
のにーっ！！」

「俺に言つたところで知らん！」

涙目ですがりついてくる少女に、稔は内心あたふたしつつ口ではつつけんどんなことを言い放った。　ぎゃあぎゃあと阿鼻叫喚の渦を巻いている横で、忘れ去られた小人が怪訝そうな面持ちにて口を開いた。

「璃奈嬢^{りな}。急いで此処を出ないとまた妖がでますぞ。普段あまり男性と話さないが故に、はしゃぐのは分かりますが時と場合を考えて下され」

「っ！　断じてはしゃいでなんかいません！　それに、もとよりそのつもりです。さあ、あなたも行きますよ」

「ち、ちよつと待つて。今すぐ此処から出るんだったら、親父がまだキャンプに居るんだ。一緒に連れていかないと」

「じゃあ、そこまで案内してください。私が護衛します」

「急いだ方が良さそうですぞ」

小人が静かに、璃奈を促した。その面持ちは先程よりも幾らか陰しくなっているようにも見える。

「どうしました？」

「そやつの父親とかいう者の気配じゃが——一向に感じられん」

「急ぎましょう。ノームさん、案内お願いします」

「御意に」

璃奈と小人、もといノームは何やら焦燥に駆られた様子で駆け出した。それに稔も反応し、追隨する。走る最中、稔が一言だけ、質問した。

「親父に何かあったのか？」

「……もしかしたら、最悪の結末を迎えているかも知れません」

そうして一向は、ノームを先頭に稔の足取りをなぞりながらキャンプに行き着いた。しかし。

「親父！　……おや、じ？」

何も無い、真っ平らな所に行き着いた。そこには、ただただ開けた土地があっただけ。人の気配はおるか、複数の人間がいた事さえ

疑わしいほどの一切の虚無が、そこに慄然と立っていたのだった。明らかに動揺する稔を横目にとらえて、何やら思索していた璃奈が、徐に口を開いた。

「とりあえずはここを出ましようか」

「な、何を言つて——っ！」

「出ますよ」

稔はただならぬ雰囲気を感じ取り——いや正直なところでいえば、恐れおののいたという方が正しいが、いずれにせよ黙って此処を去ることにした。

その後帰路に着く際に、お互いの家がわりかし近かったことから、近所で有名なカフェ『li s t e n e r』で後日落ち合うこととした。立ち去る間際、そこで詳しい事を話すと璃奈は言い残した。

稔は激しく落胆と安堵を繰り返していた。思い返しただけでも自己嫌悪の渦に巻き込まれそうになる。

昨日帰宅したときは何とかやり過ごせた。母が父のことについてやたらと心配していたが、そこは持ち前の愛想のよさで乗り切った。自分自身、事の整理が着いていないにも関わらず話すのは賢明でないと思つたからだ。しかし、翌日になつても父は姿を見せない。どんな時でも朝には帰宅していた父を母は酷く心配していた。警察には一応届け出を出したらしいが、昨日遭遇した訳の分からない奴らが裏で動いていることを稔はだいたい予想していたので、あまり期待はしなかった。

稔は自分を呪っている。母に、あの奇妙な体験談を話してはいないことを、悶々と悩んでいる。聡明な母の事だから理解をしてくれ

るかもしれないが、これ以上心配を増やしたくないのが息子としての本音だった。だから本日あの時何が起こったのかを、一体少女らは何者なのかを――問い詰めようと今に至る。

兎にも角にも女子を待たせたるのは紳士の恥とばかりに、待ち合わせの場所である喫茶店に到着した。二十分ほど早く来てしまったがその間はカフェでコーヒーを嗜みながらも、心をお落ち着かせようと考えていた。

清らかな天使が描かれた絵が飾られてある席に待ち合わせのはずだったが、それよりも先に彼女を見つけた。白と水色を基調としたフリルのワンピースが、良きコントラストと相まって黒々としたセミロングの髪を引き立てている。店員に連れがいる旨を伝えると、稔はえらく早い先客に声をかけた。

「ずいぶん早いね」

「ひえっ！ あ、稔さんですか。お早いですね。なぜって……ここですよ？ 約束の場所」

よほど男性に耐性がないのか、真性のビビリなのか。軽い悲鳴を上げながら少女はこちらへ向いた。稔はやや苦笑いをしつつ、努めて優しく接した。

「いつからここにいたの？」

「二時間ほど前からですが、何か？」

彼女はとびつきりの疑問符を頭に浮かべて小首を傾げた。そんな様子に若干見とれつつも、それ以上に盛大にあきれ返った。待ち合わせの二時間前集合なんて常識、どこで学んだのだろうか。

「なら、もっと早めに時間を設定しとけばよかったんじゃないか？」

「うう……すいません。これは一種の癖みたいなものなんです。いつもこんな感じなので、どうかお静まりを……」

涙目、弱気な声、震える体。男を前にしてこれは反則技すぎる。

周りの客は前後の会話など聞いている様子もなく、無条件に稔へ避難の目を向けた。こうなれば言い訳の仕様もない。というよりか言

い訳謎すれば帰って首を絞めることになる。と、結構なたらしで在る青年は思うのであった。演技でやってるならばそれはそれでこちらも演技の仕様があるう。しかしばがら、目の前の怨敵かのじよはそれを天然でやってのけてるみたいなので余計手がつけられない。ホントに難儀なお嬢さんである。いざ本題を切り出そうにも、こんな様子を見せられれば話す気が失せるというものだ。稔は、一人ため息をつきながらジト目で睨んでいる店員にコーヒーを注文した。店員が去り際に軽く舌打ちしたようだが、ここは気にせずいこう。なれば一瞬にしてブローケン・ハートである。

そうはいつでも、早く父の情報を知りたいので空気を壊すことに若干の躊躇いを覚えつつ、再度話を切り出した。

「昨日の事についてだが――」

「お待ちせいたしました。キリマンジャロ、ブラックで御座います」では、という言葉と再三のどうしようもない雰囲気と、明らかに作り置きである生ぬるいコーヒーを残し、店員は去っていった。

いい加減堪忍袋の尾が切れようか否か、稔が迷っていると、思いも寄らぬ事に璃奈から話しかけてきた。

「えと、昨日は、よく頑張ってくれました。実際山姥は低級な妖魔ですが、手早く一撃で滅せたのはあなたの力の賜物です。あの、ありがとうございます」

消え入りそうなくらい小さい声で、顔を真っ赤に染めながら礼をしてくれた。

その様子に見とれない男子は、いや、女子とていないだろう。若干ではあるが、稔のほうも羞恥に顔を赤く染めてどういたしましてなどと言いつつそっぽを向いた。

「あんだ、よほど男慣れしてないんだな……」

「家庭の都合上仕方ないんです！！ 兎に角っ！ 昨日の事、それから私達の事をお教えます。あなたのお父上の所在にも関わってきますし、何よりも国家機密事項ですから、心して聞いて下さい」簡単に彼女の言葉を要約すると、一般的に稔たちのような才能、

専門的な言葉でそういった才能を『見鬼の才』^{けんき}と言うらしいのだが、それをもち、なおかつ退魔の力をも身に付けた者たちのことを総称して『退魔師』という。主にそういった者達は時を重ねていくことに代々その地を守護する『守人』として根付いていくのだが、能力が薄らいでしまうのか、はたまた血縁が途絶えたのか、何らかの諸事情により、現代ではそれを生業とする者は数えるほどしかないそう。そして、守人の数に反比例かそれ以上の数で日本人口は肥大化。最近では浄化の進めぬ土地では次々に異変が起こり、人に悪しき影響を及ぼす事になっているそう。そこで政府は民間人から突発的に力が覚醒した者たちを雇用し、冷笑被害を食い止めているのだという。

「信じがたいな」

「信じていただかなくても構いません。しかし、それが真実なんです」

璃奈は、真っ直ぐに、一点の曇りも無い眼で、稔を見つめた。そこに虚偽の事実など一切感じられない威圧感と威厳を孕ませて、真摯に努めていた。

「それで俺にどうしろと？」

「あなたには退魔師になっていただきたいんです」

退魔師。それがどういった者なのか、説明は受けたが、『現実』^{じやうじつ}

は分からない。だが、目の前にいるような、見るからに窓際の令嬢の名を冠するにふさわしい美貌と、優しげな眼を持つ彼女が、身を投じなければならぬような世界に、過分なきわだかまりと焦燥感を感じたのはいうまでもない。だが、その少女から紡がれたのは何とも策略めいた言葉だった。

「それと本題のあなたのお父様の件ですが、これは現在私がかかわっている案件に深くかかわってきます。もし、聞きたいのであれば退魔師になってください。機密事項ですので」

結局はそういうことかと、稔は心底嘲るように笑った。

馴れ初め Le commencement d'amour (後書き)

最近BLACK RAGOONにハマってきたのでギャグセンスが偏ってきました。うゝむ、どうしたものか(汗)

向こう側の片鱗〈reverie〉

「なるほどな。交換条件つてわけか」

「えと、あ、すいません。別にそういう意味で言っただけじゃないんですが……事実上そうなっちゃいます」

璃菜は、心底申し訳なさそうな様子で弁解した。怒鳴られ馴れないのか、元々気弱なのか。どちらにしても本当に昨日、化物を倒した奴かどうか疑わしくなってくる。何にせよ、こんなやり取りが出来ること自体、それなりに強かってことなんだろうけども。稔は心の中で、一人苦笑すると、急に話題を切り替えた。

「ところで自己紹介がまだだったよね。僕は柳沢稔。やなさわしん趣味は料理とリハビリ、それと可愛い子猫ちゃんとのデート」

「あと、えと瑞城璃奈みずしろりなです。趣味は読書と語学の勉強です。あの……一つ訊ねても宜しいですか？」

「何？」

「猫さんとデートとは具体的にどういうんですか？」

先の様子とは全く別の、嬉々とした表情に、呆氣にとられた。彼女を起点に周りも一瞬だけ時間が止まったような錯覚に陥った。驚くべき事に冗談すらもこの娘には通じないらしい。どんだけ箱入娘なんだと呆れつつも、稔は冷静に努めるべく、一つばかり咳払いをし訂正した。

「猫つつうのは比喻だ、比喻。女性のことを敬愛してそう呼んでるんだよ」

「ああ、なるほど。女性のことですか。って……ええ!？」

急に驚いたかと思えば璃奈はみるみるうちに顔を真っ赤に染めあげていった。ん？ と、疑問に思ったのも束の間、稔はふと気付いた。

この状況、まんまデートじゃん。

最初から気付きそうなモノであるが、頭の中は昨日の事やら今朝

のことで頭が一杯だったのだ。仕方がないといえはないだろう。

「いや、別に今のことを指して言ってるんじゃないやなくてだな。っていうかデートですらないし。あ、別にしたくはないと言ってるんじゃないやなくて。つつか、むしろ璃奈みたいな可愛い娘となら大歓迎なんだから」

言えは言うほどドツボに嵌っていくことがいたたまれなくなり、稔までもが顔を赤く染めあげていった。

二人の間にえもいわれぬ空気が漂う。その環境が更に付き合っているような状況を生み出し、想像を助長し、話を切り出すことすら躊躇われることになる。しかし、この風景にほとほと呆れたのか嫌気が指したのか、元々皺くちなな顔をさらに歪ませて、一人の小人が表れた。

「埒が飽きませんな。私^{わたくし}めからお話させて頂きましょう」

「!?!」

いくら一夜明けたとはいえ、流石に、いきなり目の前に現れた異形に対処できるほどに稔は肝が据わっていないかった。いや、そもそもそんな人がいるかどうかも不確かだが、確実に稔はそんなハチャメチャな部類の人間でないことは確かであった。

「ノ、ノームさん！」

「いえ、良く考えて下され、璃奈嬢。突然開花した見鬼の才と霊能力など、記憶を消したとていずれまた開花し、この世界に迷い込むのは明白ですぞ。それに——」

小人はテーブルの上に立っているのも全く気にせず、稔の方へ値踏み半分賞賛半分を込めたような瞳にて、ニヤリと口元を歪めながら言い放った。

「こ奴の能力は中、近距離に特化しておるようじゃし、璃奈嬢との『相性』もなかなか良さそうですし」

やたらと『相性』のところを強調するあたり、何やら含みつつぶりの発言だが、当の本人はホッホッホと笑うばかりで璃奈と稔は果然とするばかりである。

何はともあれ疑似恋愛空間から脱した二人は、再び本題について話し合い始めた。

「……分かりました。ノームさんがここまで推奨するあたり、今回は『特例として』処理するのが妥当かもしれませんね」

「ん、あながと」

「ええ。今回のようなケースは本当に極稀なんですからね？ 一応、特別観察対象兼重要参考人及び依頼者という形で処理させていただきます」

「……なんだか礼を言つて損した気分だよ。ほぼ犯人が確定してる容疑者に対しての肩書モンでしょ、それ」

「す、すいません。なら、柳澤特別監視対象としては如何ですか？」
「如何もクソもあるか！ それじゃ益々犯人扱いじゃないか！ 何、何なのコレ！？ 新手的イジメか？ 若しくはコイツがジャバニーズジョークなのか！？」

思わず立ち上がった、半狂乱状態テンメイランに突入した稔だったが、流石に一息でツツコむのは堪えたのか肩で息をしながら、努めて冷静に、涙を流しながら怯えきっている璃奈へ謝罪した。

「……ごめん。熱くなり過ぎた。俺のことは普通に稔か、柳澤でいいから」

「い、いえ。此方こそすいませんでした！ じ……柳澤さん」

欧米文化でないためか、名前で呼ぶことに抵抗を覚えた璃奈は、稔とは呼ばず柳澤『さん』とした。そりゃ、他人に敬意を払うのはもつともだが——流石は日本人、とつくづく呆れてしまう稔だった。
「再び本題に移りますが、今のところお父様の所在等はわかっておりません。しかし、誰が攫ったのかはわかります。それが現在、私たちが必死になって探しているモノ——名をcrazy jokerといういます」

「crazy joker？ 三流コミックスの敵役みたいな名前だな」

「ええ、まあ、正直凄くチープな感じのする名前ですね。しかし、

これ以上の射ている名前はありません。——これを」

璃奈はそういつてリュックからファイルを、そして幾枚かの写真を机の上に取り出した。写真にはどれも赤黒い文字で『crazy joker!』だとか『俺様を捕まえてみな!!』などと辛辣な言葉の数々が軒を連ねていた。中には『ラッキーナンバーは13だぜ』などと意味不明なものもある。

「……ただのセンス最悪なグラビティ・アートじゃないな。なんかこう……気持ちの悪いものが伝わってくるような感じだ」

「ええ、ご明察の通りです。先月、12月24日時点から始まり、昨日の事件を含めて12件。神隠しと、この品性の欠片もないような落書きが連続して起こっています。それも、通常では考えられない量の高密度の障気をはらんでいました」

「……障気？」

「あ、と、すいません。障気というのは、そうですね……。定義が広範囲かつ曖昧なものですからコレとは言いづらいのですが、簡単に申し上げますと、異形の者達や邪念を抱く人間やはたまた物品から発するモノの事です」

「それがあるとどうなるんだ？」

「これも時と場合によって様々です。自然事故に発展したり、はたまた異形に昇華したり。何にせよ、動植物に害を成すことは確かです」

「なるほど。で、璃奈を含め退魔師の方々は血眼になって血塗れイカレ道化師ヒエロを探してるわけだ」

璃奈が静かに頷いたのを見ると、稔は嘲るような笑みを一転、暗い面持ちで結論を述べた。

「……要は、親父はもう助からないってことだろ？ 少々説明してくれたが結局はそういうことなんだろ」

「い、いえ別にそういう意味では」

「そういうことじゃねえのかよっ！」

稔は激昂し、テーブルに激しく手を叩きつけた。その拍子にカツ

プに入っていた残り少ないコーヒーが零れ、周りの人たちもその様子からただならぬモノを感じたらしく店員を呼ぶ声さえ聞こえた。

「……ごめん。場所変えようか」

「なら、良いところがあるので着いてきてください」

その後、店員が駆けつけたときには零れたコーヒーと、少々余分に置かれた代金があっただけであった。

「ここがいい場所か？」

稔が訝しみながら見上げた先には十字架のオブジェと、日光を反射して輝くステンドグラスがあった。その様子に微塵も気にせず、璃奈は胸を張って満面の笑みで答えた。

「ええ。心安らく我が家にして、この町で一番、星ヶ丘教会です！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6912k/>

crazy joker

2011年5月17日05時59分発行